



まえがき

このまえがきを書いているおじさんは、まだまだおふとんでももふもふぬくぬくしたいのですが、編集担当者からの大量のメールが「もう締め切りだ」と言わんばかりなので諦めておふとんからでてきています。しかしやっぱりぬくぬくしたいので、もふもふぬくぬくさせてくれないとまえがきを書けないのだ、と訳のわからない言い訳をしています。

この本を手に取り、そして丁寧に前書きまで見てくださった読者の皆様、おはようございます!私は現代視覚文化研究会の会長の芝脇 智将(じっそうのひと)です。ご覧の通りこのサークルの名前はすごく長く、大概の場合略されています。そう、「げんしけん」。

その「げんしけん」では何をしているかと言いますと、創作活動です。名前通りであれば現代文化について研究しているはずですが、そんなことは気にしてはいけません。文章を書いて会誌を作ったり、音楽を作ってCDを作ったり、イラストを描いてマンガを作ったり、プログラムを書いてゲームを作ったりしています。また有志が集まればTRPGが始まったりボードゲームが始まったり、突然面白い話が始まったりと賑やかなサークルです。

話は変わりますが、おじさんはゲームを作るプロジェクトを進行させています。なかなか忙しい上にパソコンが何か凄そうな別のプロジェクトで酷使されてすぐに潰れてしまうのでなかなか進んでおらず、会議のたびに謝罪会見と土下座を行うという新しい文化を生み出しました(関係各位には多大なご迷惑をお掛けしているわけで、非常に申し訳ないです)。最近はUnityとか言うすごいツールがあったりとあまりプログラミングをせずともゲームを作ることができますが、おじさんは何故か未だにがりがりプログラミングをしてゲームを作っています。だって楽しいんですもの。

こんなダメダメなおじさんがまえがきを書いておりますが、他の会員の皆様が書いたここから後ろのページは素晴らしい出来です。是非お読みください。

電子制御工学科 3年
芝脇 智将(じっそうのひと)

	もくじ	
1	まえがき	33
2	もくじ	
3	小説	
4	宇宙を切望した親友と宇宙を複製した自分	小刀
11	人を化かすキツネ	ともぼん
14	あみあみ	古月爪有
23	二十日草の命日	箱庭氏
27	イラスト	箱庭氏
28	イラスト	クロム

小說作品

宇宙を切望した親友と宇宙を複製した自分

吐く息も白くなる、十二月の放課後。教室の掃除を終えた私は、先客が待つであろう一室のドアを叩く。引き戸にも関わらず押すか、叩くかを悩んだのは午後を受けた古典のせいだろう。返事がないのを確認したところで、ドアノブをひねり中へと入る。

長机が二つと、鈍い灰色の棚だけという殺風景な部屋。その中にいたのは、少女が一人だけだった。括る必要もないくらいの色い短髪を僅かに垂らし、分厚い本に目を落としている。ちらりとページが目に入るが、とても日本語とは思えない文字の羅列で紙面が埋め尽くされている。しかし少女は、その難読な文章に苦しむ様子も見せず穏やかな顔でページをめくっていた。

「……あれ、詩井ちゃん？ おかえりー」

少女は私——糸川 詩井に気づいたらしく、本から顔を上げて微笑んでくる。私もそれに微笑み返し、尋ねる。

「ただいま、リン。で、今日は何語の？」

「今日は仏語かな。外国の哲学も面白いものだねー」

ふにや、という効果音が似合いそうな笑顔を浮かべる少女——リンこと、秋山 輪花。彼女が平然と仏語の本を熟読しているという事実、初対面の人は驚くだろう。

「ほんとに、いつも思うけどすごいよね。私なんか英語を話すだけでも精一杯なのに」

「詩井ちゃんほどでもないよ。えーっと、『詩井言語』だったけ？」

「……『C言語』ね。けどプログラム言語は理解できても、外国語を理解できる気はしないよ」

「Par exemple, il ne est pas difficile? (え、難しくないよ?)」

「……うん、やっぱり無理だと思う。何言ってるか分からない」
そんなとりとめのない会話を続けながら、棚の上に置かれた備品のノートパソコンを起動する。

——「言語研究会」。表向きは方言や外国語といった、国内外の言語について研究する部活。実際は幽霊部員が多く、ほとんど私とリンの二人で細々とやっているようなものなんだけど。

ちなみにリンはああ見えて英仏独露中の五言語を話す多言語使用者だし、私もプログラム言語なら七、八種類くらいなら使用できる。ま、だからどうしたって話なんだけどね。

「そういうえば詩井ちゃん、いよいよ明後日だよ、明後日の金曜日！」

「明後日……ああ、双子座流星群か」

「そうそう、楽しみだよねっ！」

私とリンは小学校からの付き合いだが、リンは宇宙が好きだ。父親が宇宙飛行士ということで興味を持ったらしく、特に流星群や日食月食となると目を輝かせる。私達が九歳の頃に金環食を見逃したときは、大泣きするリンを慰めるのに苦労した記憶がある。

「じゃあ今日は、早めに切り上げて帰りますか」

「そうだねー。じゃあこの本読み終わったらお終いにするね」

そう言い、再び本に目を落とす。私はどうしようかなと思いつりあえずテキストエディタを起動する。

そうして一時間も経たないうちに、リンが本を閉じた音で今日の部活はお開きとなった。明日はリンをびつくりさせる物でも作ろうかな。なんてことを考えながら、私達は別途、帰路に着いた。

——翌日に、彼女がどうなるかも知らないまま。

翌朝、木曜日。いつもと変わらぬ時間に目を覚まし、家を出て、電車に乗り学校に着く。そしていつも通りの時間に教室に入るも、教室の中にはいつもなら無いはずの違和感がある。

「あれ、……ああ」

少し息をつく、すぐにその理由に気が付いた。リンだ。私と違ってバス通学をしているリンは、大抵私よりも先に学校に来ている。うちの学校ではホームルームが八時三十分が始まるが、私が学校に着くのは二十分で、彼女が着くのは本人曰く十五分。彼

女としては珍しく寝坊でもしたのか？　と思ひながら鞆を下ろそうとしたとき、一枚の紙が机の上にあるのに気が付いた。

『『新型インフルエンザの流行とその対策について』……？』

そのプリントに目を通そうとしたとき、教室中に響くチャイムの音。クラスの皆が着席するのに合わせて、私も席に着く。

ガラガラと戸を引き、入ってきたのは私たちの担任——ではなく、別の人間だった。

「あー、お前等席に……着いているな。理由はこれから説明するが、今日は弓月先生じゃなく俺がホームルームをさせて貰うぞ」

そう言いながら、入ってきた男性は教卓に左手を載せる。
(げっ……ゼウスかよ……)

(ユミユミ先生のホームルームが一日の癒しなのに……)

ゼウス、とクラスの誰かに陰口を叩かれている教卓の男性は、私達第一学年の主任教師である白瀬先生。「うす」と「ぜ」で「ゼウス」というわけだ。……蔑称が神の名前になるくらいには恐れられている先生である。

先生はそんな声に対して反応することもなく、話し始める。

「もうプリント配ったから知ってると思うが、最近新型のインフルエンザが流行りつつある。五日間は学校に来れなくなるからお前等にとつちや痛手だろうし、何人も休むことになりや学級閉鎖で他の奴にも迷惑かかるんだからなるべく備えるように」

淡々と、事実を述べる先生。まあ私は毎日手洗いうがいも欠かしていないし、そこまで気にすべきことも……

「ああ、言い忘れるところだった。弓月先生、あと秋山輪花の二人はもう罹ったからな。当分会えないぞ」

……え？　リンも？

「とりあえず大きな話は以上だ、んで、細かい連絡だが——」
そこからは、先生の話す声も、全く耳に入らなかつた。

気が付くと、既に昼休みになっていた。下を見ると、丁寧さま

とめられた物理のノート。意識はなかつたのに、律儀にペンを持ってノートを取っていたという事実には我ながら苦笑してしまう。

けど、「どうしよう」。私の頭を三時間以上悩ませていたのは、そんな一フレーズだった。

リンは間違いなく、明日の流星群を楽しみにしている。しかも都合が悪いことに、明日は彼女の父の誕生日。これが去年までならビデオに残して見せる、などで対処できただろうが、今年はそうもいかない。市販のプラネタリウム……ダメだ、通学の駅も含め、そんなものを売っている店はなかつた。取り寄せにしたって、明日には間に合わない。

どうしよう、どうしよう、どうしよう。頭を抱えて考え込む。
「……だからさー、本棚買ってくれって頼んだんだよ」

「お前、ホントにそろそろ漫画捨てられるぞ……」
周りの会話が耳に届く。うるさい、少し静かにしてくれ。

「それオカンにも言われたよ。どうせ読まないんだろって」
「そりゃーなあ……」

うるさい、うるさい。少しでいいから、集中させろ！
「んで最後にはさー、そんなに欲しいなら板は買ってやるから『自分で作りやがれ』って……」

「い、糸川さん大丈夫……？」
「あ、ごめんごめん。大丈夫だよ」

クラス中の関心を集めてしまった。いけないいけない。

けど、『自分で作る』……。星空を自分で作るなんて、一般人なら無理だ、と諦めるだろう。けど、私は生徒であり、そして――

プログラマみたいなものだ。この特技を使えば、あるいは。

幸い、五限からは自習だ。時間はある。私は友人の為、何としてもプラネタリウムのプログラムを作り上げることを決意した。

放課後。鍵を借り、すぐさま部室に向かう。

幸い、昔行った宇宙館でプラネタリウムのソースコード——プログラム『中身』の様な物——は見せてもらったことがあった。だから、さっきの自習時間でその記憶を基にした大まかな完成予定は出来ている。あとはそれを、実際に打ち込むだけなのだが。焦りのせいかな、鍵が上手く鍵穴に刺さらない。落ち着け糸川。落ち着けば開くんだから。

——カシャン。小気味よい金属音を聞き届けた私は、すぐに室内に入ってノートパソコンの電源を押す。[Now Loading……]の表示が私の焦りをさらに煽るが、ここで慌ていても仕方がない。パソコンを棚から机に移し、鞆から眼鏡を取り出す。四角いノンフレームのそれは、私がプログラムを作るときの必需品である。そしてこれから、『学生』糸山詩井は『プログラマ』糸山詩井に変わる、という意思表示でもあるのだ。

起動が終わり、小さな記号が整然と並んだ待機画面が浮かぶ。それを見届けると、私は誰に言うわけでもなく呟いた。
「……さあ、始めますか」

これが春とか秋ならまだマシになるのだろうが、今は冬。つまり、当然寒い。キーを叩く指もかじかみ、普段はしないような撃ち損じを何度もしてしまう。目も疲れるし、肩だつて凝る。けれど私は手を止めない。止めるわけにはいかないし、何より止めたくない。友人はもつと苦しい思いをしているんだから、自分がこの程度で音を上げるわけにはいかない。
だから私は、ただ一心不乱にキーを叩く。

一体どれほどの時間が経っただろうか。室内に鳴り響くチャイムの音で、意識が戻る。完成度は……六割といったところか。ポーチからメモリを取り出して、作ったソースコードを保存する。立ち上がろうと腕を上げると、肩に鋭い痛みが走る。そりゃ何時間もデスクワークもどきをしていたら、こんな事にもなるさ。

と苦笑しながらパソコンの電源を落とし、鞆を持ち上げる。
「お疲れ様でした」

誰もいない部屋に、その一声で別れを告げる。明日は無理だろうけど、願わくば来週、友人と笑いながら訪れたいものだ。と、そんな淡い期待を抱きながら。

……それにしても、眠い。これ、家までもつのかな……？

更に翌日、双子座流星群当日の放課後。

結局昨日は家で作業をすることなく眠りに落ちてしまったため、大幅に時間が少なくなってしまった。現在時刻は二時三十分。部屋の閉鎖は六時三十分。あと四時間しかない。

急がなくては。ノートパソコンを起動し、立ち上がるのを待つ。
「頼むから早くついてよ……！」

ほんの数秒にも満たない、わずかな時間。それでも今の私を苛つかせるのには十分な長さだった。

「……よし！」

眼鏡をかけ直し、指を掛ける。あと四割。なんとしても四時間以内に終わらせなくては……！

目に入る情報は英文字の羅列、指に届く情報は板を叩きつける衝撃。体中の節々が悲鳴を上げる中、不意に首筋に伝わったのは——まるで氷のような、冷たい触感。

「ひゃあんっ！」

余りの冷たさに、思わず変な声を上げてしまう。眼鏡が傾き、中途半端にぼやけた視界が気持ち悪い。

「あーっ、一体何……！」

ずれた眼鏡を直しながら、後ろを振り向く。そこには、赤色の缶を持って私を見下ろす、

「う、白瀬先生？」

「…………！」

白瀬先生の姿があった。

「え、えーっと。どうされました？」

恐る恐る尋ねる。あれ、先生がここに来る用事なんて……？

「どうされた、じゃないだろうが。今は何時だ？」

「い、今？」

質問に質問で返すのもどうかと思う、とは口に出さず、備え付けの時計に目をやる。作業を始めたのは三十分程前のはずで……

「……七時、十五分？」

三十分どころじゃない。しかもよく見たら、外が薄暗いを通り越して真っ暗になってる。そして私の顔はみるみる青ざめていく。

「ったく、七時過ぎても部屋が明るいつて言われたから顧問として見に来たんだがな。まさか時計を見てすらなかったとは」

大層面倒くさそうな顔で、そう皮肉を言われる。あ、白瀬先生って言語研究会の顧問も担当してたな。ってそうじゃなくて！

急いでパソコンの画面に目を向ける。あ、あと一割くらいが完成してない。今から家に帰ってたら出来上がる頃には間違いない日付が変わっちゃうし……

「せ、先生すみません！ 大した理由じゃないんですけどもう少しだけ活動を——」

先生に陳情しようとするが、その前に差し出された一枚の紙で遮られる。その紙の上には、『反省書要綱』と書かれています。

「どうせ秋山絡みの何かだろ、昨日の自習時間でも熱心になんか書き上げてたしな」

課題はやってたから言わなかったが、と結んで紙を机に置く。そして缶のプルタブを開け、私に差し出してきた。

「もう許可は取ってある。代わりに冬休み、反省文でも書いてもらうが安心しろ。九時くらいまでなら認めてやるよ」

面倒くさそうな顔は崩さないまま、そう続けた。

「あ、ありがとうございます！」

礼を述べ、貰った缶の中身を飲み干す。よく冷えた芳醇な林檎

の味は、熱くなった頭を冷やすのにうってつけだった。気を取り直して、パソコンに向き合いキーを叩き始める。

「……一つだけ聞いていいか」

「はい？」

背中にかげられる、先生の声。

「何故お前は、秋山のためにそこまで苦労を重ねられるんだ？」特に深い意図もないであろう、単なる疑問。私は一瞬だけ指を止めたが、すぐに手を動かして答えた。

「プログラマは、大衆の為にキーを叩け」。私はそう教わりましたから」

「……そうか」

先生もそれで納得したのか、それからはどちらとも口を開くことなく、ただ静かに時間が過ぎていった。

「や、やっと終わった……」

固まりきった体を無理やり伸ばし、痛みを目を瞑りながら呟く。現在、八時十分。まだ『本物』が始まるには少し猶予がある。

「先生、ありがとうございますただただッ!？」

データをメモリに保存し、部屋を発とうとしたところで思い切り右肩を掴まれる。当然、ずっとパソコンに向かい合っていた私の肩は石のようになってるわけ。

「な、何するんですか！ 痛いじゃないですか！」

抗議の声が口から飛び出していく。しかし、先生は仰々しく首を振り、いつもの面倒くさげな顔で私を見下ろしてくる。

「お前、今何処にどうやって向かおうとした？」

「え、リン——秋山さんの家に、バスで向かおうと」

「……七時四十七分。この辺の路線は三十分前が終発だ」

「……………えっ」

まさかのバス使用不可。だとするとどうやって私はリンの家に
行けばいいんだ？

せわしなく窓の外と時計を交互に見続ける私の、今度は左肩が
掴まれる。だから痛い痛い痛い！

「んなことだろうと思った。あの家には俺も用がある、乗ってけ」
プロジェクトも積んである、と言いつつ、先生は私の返事も
聞かずに歩き出す。一瞬呆気に取られたが、渡りに船ならぬ渡り
に車。ノートパソコンを担いで、急いで先生の後を追いかけた。
……守衛さん、鍵を返すとき全力で投げ込んだのはごめんなさい。

「こ、こんばんは……」

車に揺られること僅か二十分。私は白瀬先生の華麗な？ 運転
で、秋山邸までやってきた。

「まあ、いらつしやい。詩井ちゃんに……白瀬先生？」

出迎えてくれたリンのお母さんも、私の隣に驚いている
様子。しかし先生は、普段の偏屈な顔ではなく、凜とした、とい
う表現が似合いそうな顔で秋山さんの顔を見つめていた。

「ああ、大丈夫です。今日の私は『教師』ではなく『秋山直紀の
友人』ですから。糸川と上がらせてもらってもよろしいですか？」

その言葉に安心した様で、秋山さんはほっと胸をなで下ろす。
「そういうことなら是非。そういえば、輪花があなたに会いたが
つてたから、よければ会ってあげてくれない？」

笑顔で浮かべ直し、私にそう言ってくれる秋山さん。この状況
からどうやって切り出そうかと思っただけに、向こうからの
提案はとてもありがたい。

「はい、勿論です」

パソコンとプロジェクトを詰めた鞆を持ち、秋山邸へとお邪魔
する。秋山さんが先生を案内するのを見届け、私はリンの部屋に
続く階段に足を掛ける。さて、病床の眠り姫はどんな思いでい
るのだろうか。なんて考えを胸に、一歩一歩階段を登って行った。

「あ、いらつしやい……」

引き戸に手を掛け部屋に入ると、薄暗い部屋で一人横になって
いるリンの姿が見えた。心なしか、まだ少し顔も赤く見える。

戸を後ろ手に閉め、ベッドのすぐ隣まで近づくと、
「ん、よいしょ……」

「ちよ、起き上がって大丈夫なの？」

ベッドをリクライニングシートのように少し傾け、リンは体を起
こす。ややその手つきがおぼつかなく見えたが、大丈夫だと言っ
ているような、まだ少し辛そうだが——微笑みで少し安心する。

「こ、こっちの方がお話とかするのに楽だしね」

「……まあ、大丈夫ならいいけど」

ベッドの側板にもたれかかり、首だけを彼女に向ける。罹患か
ら数日経過したからか、息が荒かったりはしていないようだ。

「……ね、学校はどんな感じ？」

「……もう冬休み前だしね。みんなダラダラしてる」

「そっか……私のこと、誰か心配してた？」

「結構みんなが。まあ話したの白瀬先生だし」

[Haha, ich danke, Lehrer. …… (あはは、先生らしいね……)]

なるべく負担をかけないよう、ゆっくりと話を進める。メイの
方も、最初は明るい声音だったが徐々に陰りを帯びてきているよ
うな、そんな印象を受ける。

「……あはは、せっかくお父さんの誕生日なのに、みんなに迷惑
かけちゃうし。お父さんが家にいるのだからそうそうないのに」

「……メイ？」

今までぼつり、ぼつりとしか言葉を発しなかった彼女が、突然
堰を切ったかのように話し始める。

「せっかく、貴重な休みを割ってくれたのに。詩井ちゃんと一緒
に、皆で空を眺めようって話してたのに」

言葉が震え、途切れ途切れになる。不安に思っただけの顔を覗
き込むと、

「な、なんでこんな、ことにさつ……!!」

——彼女は、泣いていた。

無理もない。彼女にとつて楽しみだったことが、全て自身の病気のせいで台無しになつてしまつたという事実。しかも、それが他人にまで迷惑をかけてしまつたというのだから、尚更だ。

「うっ、ううっ……」

——「だったら私は、何の為にここに来たか？ 『彼女に対してあげべきこと』があつたからだろう。絶望の淵に暮れる彼女に、出来ることなんてそれしかないのだから。」

「……輪花。見たいものがあるから、目、瞑つて欲しいかな」
「……え？ う、うん」

私の言葉に、少し戸惑つたもののリンはすぐに目を閉じてくれた。それを見届け、持つてきた鞆からノートパソコンとプロジェクトを取り出して起動する。静かな室内に、カリカリというディスクの回転音だけが耳に触れる。

「もうちょっと待つてね」

パソコンのポートにプロジェクトをつなぐと、天井に向けたレンズからパソコンの待機画面が映し出される。

「……これなら大丈夫かな」

自分だけに聞こえるくらいのか細い声でそう呟き、あるプログラムを起動する。彼女が見ることを望み、私が見せることを望んだ年一度の星空。

「あ、もう大丈夫だよ。目開けてね」

「うん……」

彼女が目を開くのに合わせて、エンターキーを叩く。パソコン、という気の抜ける音と共に天井に映し出されたのは。

天井に円を描くような、途切れ途切れに続く光の線達だった。天井を見上げるメイも、泣き止み呆けた顔で天井を見上げる。

「……これって、双子座の……？」

「うん、そうだよ。一昨日から楽しみにしてたみたいだしね」
双子座流星群。本物には遠く及ばないだろうけど、それでも少

しは様になる見た目に仕上がつてよかった、と胸をなで下ろす。

「あー、上手くいつてよかつたなあ……」

私も天井を見上げ、彼女には聞こえないよう呟いた……つもりだったのだが、バツチリ聞こえてしまつていたらしく。

「もしかして、これ作つたのって……詩井ちゃん？」

割と聞かれたくなかつたことを聞かれてしまう。あー……ホント即興で作つたものだから出来ればバレたくなかつたんだけど。

「そうだよ……つて言つたら？」
少しヒクヒクする口を無理やり動かし、正直に告白する。どんな返事が返ってくるだろう、と内心怯えながら彼女の方を向くと。

「そっか……ありがとね、詩井ちゃん！」

天井は見上げたまま、しかし笑顔でそう言つてくれた。嬉しさで、私の視界も少し滲む。袖で涙を拭い、もう一度横を向くと。

——あーもう、星より輝く笑顔してるなあホントに！
そんな夜空の上映会は、あと数分だけ続くのであった。

リンに別れを告げ、一足先に外で先生を待つ。

「……それにしても」

結局、あの後。外に出てから考えたが。別に自分で作らなくても解決策はあつたんじゃないかな、と思つた。ネットの海には、私が作つたような物なんていくらでも転がっているだろうし。

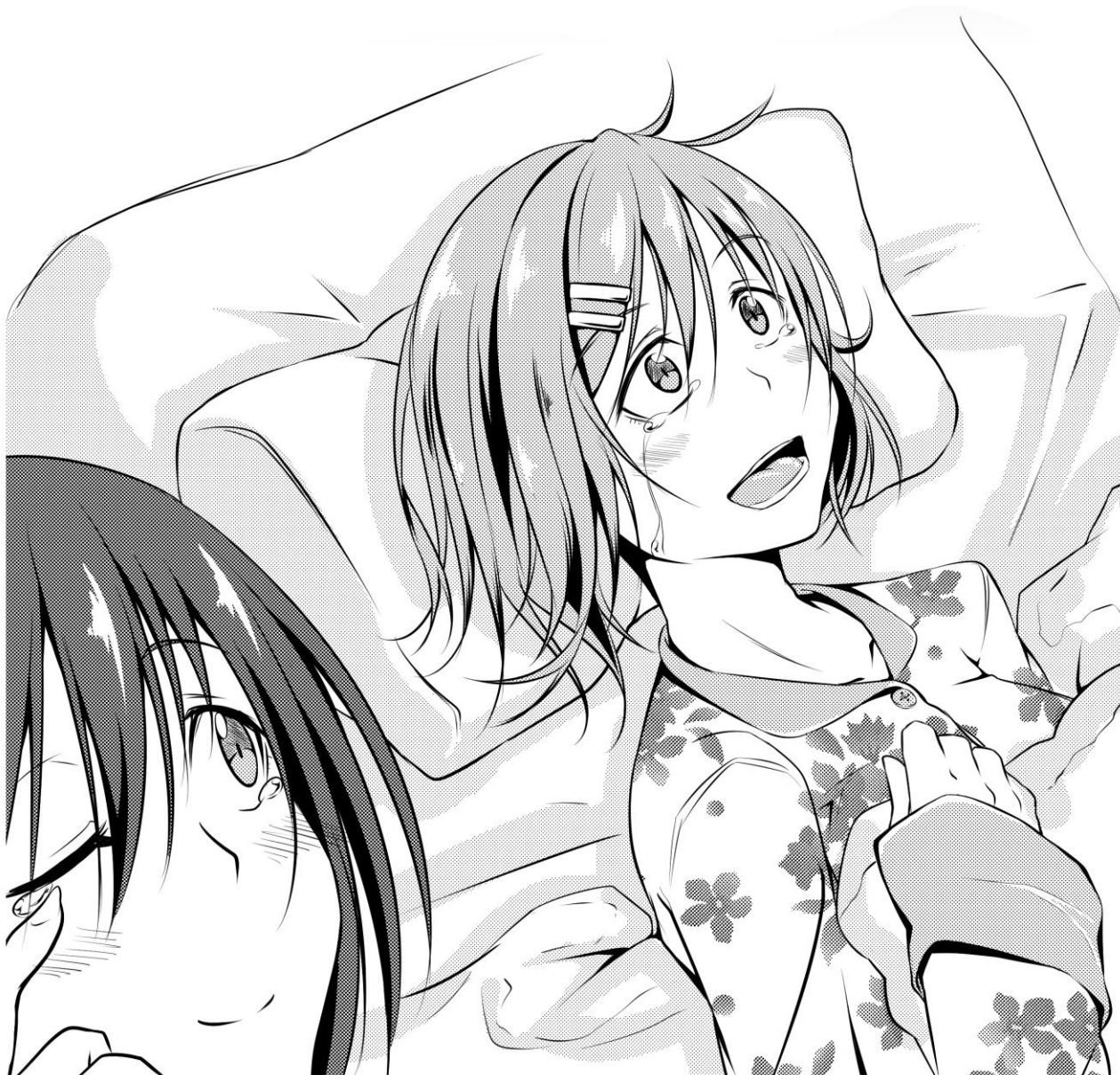
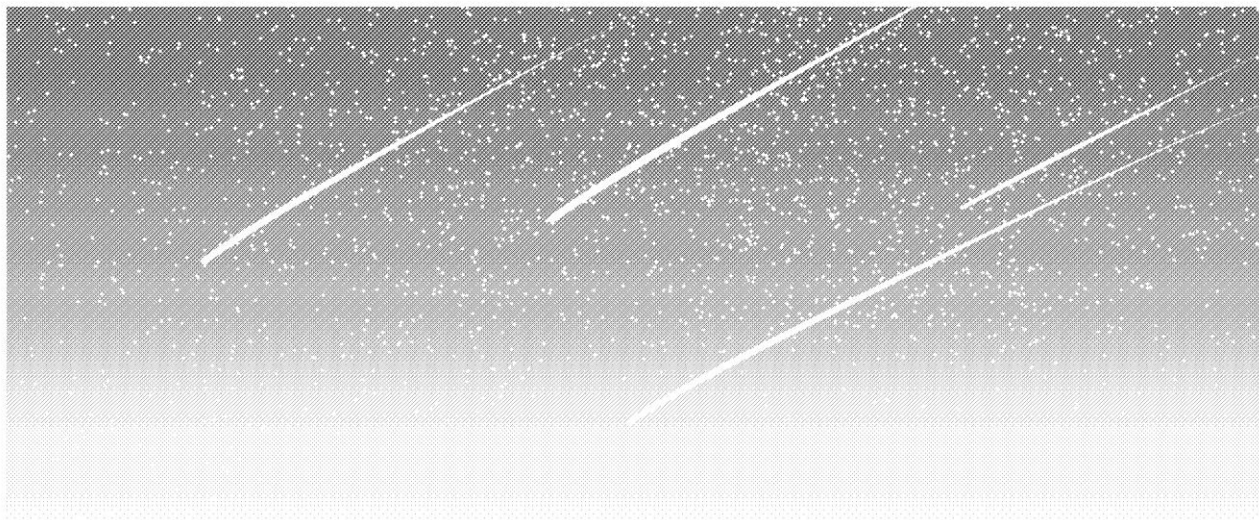
「……でもまあ、別にいいか」

首を少し振つて、一人呟く。結局重要なのは、『どうやって解

決したか』ではなく『そもそも解決できたか』なんだろうし。私は信条を曲げず、彼女は願いを叶えられた。それだけでも、私の苦労は無駄じゃなかつただろう。つて、そういえば反省文……まあ、今は気にしないでおこうかな。

ほう、と疲れを乗せるように吐いた白い息は、真つ暗な闇の中で、ただ降り注ぎ続ける星々の中に消えて行つた——

くすく



人を化かすキツネ

ともぼん

日本国某所の人も立ち入らぬような山奥。

ここに人に化けることのできるキツネがいるとのウワサを聞きつけ、私は遠方からわざわざこの地にまで足を運んだのだった。

「ここまでくるのは大変だったんだから、ちゃんと存在しているよね」

期待と不安の入り混じった感情を胸に一人、山の中へと入って行く。

私は「人に化けるキツネ」というものを、以前からずっと探し続けている。

そして、その「人に化けるキツネ」に出会うために今まで数々の土地を訪れてきたが、いまだに「人に化けるキツネ」に出会う事ができずにいた。

一時は、もう「人に化けるキツネ」に出会えなくても良いとも思ったが、今までの努力が無駄になるという人間的発想によって私は未だに「人に化けるキツネ」探し続けているのである。

*

山に入ると、確かにそこは何だか神聖なような、とにかく美しい山であった。

よく晴れた午後の日だったので、鳥は歌い、木々は風に揺れるまさしく理想郷のような山。

今度こそ「人に化けるキツネ」に会えるのではないか。そんな期待に胸を膨らませて山の中を進んでいく。

しばらく山の中を歩き続けていると、少し開けた場所に出た。そこには鳥や鹿などの多くの動物が集まっており、至極穏やかな雰囲気醸し出していた。

そして、その広場のような場所の動物たちの輪から少し外れた切り株の上に、穏やかな動物たちとは違った凛々しい雰囲気漂わせたキツネが動物たちの輪を見守っていた。

この広場もそうだが、何よりもずっと探し求めていたキツネに出会えたかもしれない。そんな感動が私を包む。

歓喜に身を震わせ、キツネに近づこうとした時であった。辺りの空気が一変してピリピリとした痛々しい物になった。

驚いて周囲を見渡す。

そこには、先程までの穏やかな雰囲気とは打って変わって、部外者をここから排除しようとする敵意に塗れた動物たちの姿があった。

私はその動物たちの雰囲気を押され、その場から動けなくなつた。

恐らく、不用意に近づけば外敵とみなされ、最悪の場合は殺される。それだけは避けたかった。

震える声で動物たちに声をかける。

「私は敵じゃない。アナタたちに危害は加えない。用事があるのはそのキツネだけだ。どうか少しでも良いからこの場にいさせてくれないか」

果たして意思は通じたのであろうか。動物たちの雰囲気は、先程の和やかなものではなかったが、少なくとも殺意をむき出しにした恐ろしいものではなくなっていた。

おそろおそろの広場の中を移動し、キツネの元に向かう。

「アナタが人に化けることのできるキツネですか？」

震える声で問う私に対して、そのキツネは男性とも女性ともとれない妙な声で私を笑い飛ばした。

「あつはつはつは！ 私が人に化ける？ どこでそんな妙な噂を聞いたのかは知らないけど、私はそんなことはできやしないよ。第一できたとしてもする意味が無いし、したくも無いね。私は人間が嫌いなんだ。さっさと帰んな」

言い終わるや否や、周りの動物やキツネが大声を上げて笑い始めた。

——また「人に化けるキツネ」に出会えなかった……。森の動物たちに笑いものにされたことよりも、またもや「人に化けるキツネ」に出会えなかった。

それが私には一番のショックであった。

*

トボトボと山を下り、山の麓に差し掛かる。

私は辺りをキョロキョロと見回り、誰もいない事を確認すると、ひょいっと飛び跳ね空中で回って見せた。

*

ドロン。間の抜けた音がして車の中で俺は目を覚ます。

運転席の窓から外を見ると、丁度山の麓からユーリが出てきたところだった。

「よお、ユーリ。どうだった？」

「ぜんぜんダメよ。この山の動物の排他的っていうか性格の悪い奴ばかり！山自体はとっても綺麗で美しかったのに……。」

とにかく、もうこんな山二度と来ないわ！」

「……中何があったか知らねえけど、俺はそんなことを訊いてるんじゃないよ。でもま、その調子だと出会えなかったみたいだな」

「いや、会えはしたわ。でも今回も違ったみたい」

「まあ、そんなこったろうとは思ったよ。でさ、これに懲りてそろそろ俺の提案でも……。」

「嫌よ、街中で『人に化けるキツネ』を探すなんて！」

「でもさあ……俺らだってこうして人間の世界に混じって生き

てる訳じゃん？」

「それじゃあアナタは町行く人間に『アナタはキツネですか？』って訊いて回るの？下手をすれば警察沙汰よ。アナタの案は最終手段ね。とりあえず、まずは有力な候補を探って行きましょ」

「……なあ。俺ら以外の『人に化けるキツネ』を探す意味ってあるのか？」

「寂しいこと言うわね。仲間が欲しいじゃないの。できるだけ多くね」

「それもそうだけど、お前の足をさせられる俺の身にもだな——……。」

だが、俺の言葉に対してユーリは全く耳を貸さずに車の中に乗り込む。

「ほら、ボサっとしてないで早くしなさい！今日は候補が、まだ一つだけあるの。今度こそ私たちの仲間に出会おうんだから！」

俺は重い足取りで車に乗り込み、車のエンジンをかけた。

(了)

※挿絵です



女子高生

..592.27 12".. 7カト

あみあみ

古月爪有

つもらえないかと楽しみにしている。なんてのは少し夢を見てい
るだけで、さすがにそれを言い出す勇氣は僕にはない。

キーンコーンカーンコーン、と一度そう思ってしまったえばそう
としか聞こえなくなる学校のチャイムを聞く。しゃべりつづけて
いた先生が、「おお、もう終わりか……。じゃあこゝまで」と言
う。委員長が「きりーつ、れい」と言う。ばらばらに「あやーっ
した」とか「ありがとうぎーつした」とか言う。僕も頭を下げて、
いけれど。

しばらくは、沈黙が続いて、二人してせつせと手を動かす。
その間に、いろいろなことを考える。ああ、そういえば先輩が、
背筋が曲がっているのが良くないと言っていたな、とか、先輩は
編み物好きだよな、とか、今日は先輩と何を話そうか、とか。

教室を出るとすぐに、連絡通路が見える。昔は使っていたけ
れど少子化で必要なくなった校舎——今日では部室棟と呼ばれ
る校舎につながる通路だ。その部室棟三階の突き当りが、僕の目
指す部屋だ。
その部屋の扉の上には古い明朝体で、「家庭科室」の文字。
「こんにちはー！」と大きな声で扉を開ける。「こんにちはー」
と先輩の柔らかい声が帰ってくる。先輩は入り口に近い、壁際の
丸椅子に座って編み物をしていた。僕だってそんなに長い間教室
に留まっているわけではないと思うのだけれど、いつも先輩は先
にこの教室で待ち構えている。そして決まって楽しそうに何かを
編んでいるのだ。ここ数日は「実用的なものを作ろうよ！」と言
って、マフラーを作ろうとしている。先輩の編み物の腕は一流と
いっても差し支えないほどなので、もしかしたらマフラーがひと
準備しなきゃなー、とか

いるので丁寧に。

先輩は僕のようなことはなく、するすると腕を動かしてどん
どんマフラーを形作っていく。マフラーは単純な作業の繰り返し
だから、こころが落ち着くと、昨日そう言っていた。

で、集中力の切れてしまった僕は、「先輩、せんぱーい」な
んて先輩に話しかける。先輩は編み物に集中しながらも「はい
なにかしら？」なんて返してくれる。

「いえ、特に用事があるわけでもなくって、そろそろ雪かきの
準備しなきゃなー、とか」

「そうだねえ。今年もきつと降るし、体力つけとかないとね」

「先輩のお家は誰が雪かきをするんですか？」

「うーん、今年からは兄貴が家にいないし、私かなあ？ 動く

のは苦手なだけだな」

「先輩、脚ほそいでもんね」

言ってしまったから、しまった、と思った。これではセクハラだ。しかしその後ろで、「やつほー、先輩とたくさん喋れてる！」とか、「本当に細かいよなあ……どうやってあるいてるんだろ？」とか、そんなことを思っている僕もいるのだ。しまった、思った、思ったのにもかかわらず、ちよつと調子に乗った僕は、こんなことを言ってしまう。

「先輩、よろしければ、僕がお手伝いに行きましようか？」

「うん、遠慮しとくね」

素気無くかわされてしまう。もうひと押し、というところなのかもしれないけれど、だいたいこの辺りが僕の限界だ。「あ、……そうですね、はい」なんて小さな声で言ってから、編み物に再び集中する。こういう時の逃げ場として、編み物は最強だ。無心になれるし、ちよつと凹んだり気まづくなったら会話を打ち切る理由にもなる。

しばらく無心で編み物をしていると、また頭がうごうごと思考を開始する。また、先輩の脚……眺めてたらバレて怒られそうだな、とか、あれ今、密室に先輩とふたりきりなんじゃね、とか。

こんなことを考え始めるともうだめで、僕の心は邪な考えに支配されてしまう。それでちらちらと先輩の方に目をやりながら、編み物をしているふりをする。

集中が足りていなくても、そこそこできるのが編み物だ。ただしそこそこの程度の出来にしかならないけれど。今日は、緑色にピンクがアクセントカラーののずんぐりむつくりとした怪物が出来た。本当はもつと円柱形にしたかったのだけれど、これはこれで味がある、と妥協する。あとは目玉をつけたら完成かな。そろそろ夕暮れだ。

「先輩、僕はもうお暇しますけれども、先輩はどうなさいますか？」

「うーん、私はこれ完成させちゃいたいから、もうちよつと残るね。戸締まりは任せて下さい」

そう言っ先輩はほとんどできているマフラーを掲げる。うしろに僕の緑怪物がぎよろりと目玉をのぞかせる。

「はい。じゃあ僕はこれで。また明日」

「うん、またね」

そう言っ家庭科室を辞去した。

次の日の昼休み、クラスメイトに話しかけられた。一番仲の良い、友達といっても過言じゃない奴だ。

「なあ、お前いつつもさ、放課後っどうしてんの？」

「部活だけだ」

「そうなのか？ 何部なんだよ、運動はあんまり得意じゃないんだろ？」

「手芸部」

手芸部？ と友人は繰り返す。そんな部活があったのか、知らなかった……。と言う。それから友は、「何作ってるの？」と聞いてきた。僕は「ぬいぐるみ。先輩はもつといろいろ作ってるけど」と答える。

「先輩？ 一人じゃないのか」

「まさか。ひとりで部活動なんてよっぽどマイナーじゃなきゃ、そんなことしないでしょ」

「そうだけだな。最近は手芸なんてやってる奴、少ないじゃん。ところでさ……」

ところでさ……と、友人は声を潜めた。先輩って、女？ かわいいの？

僕は無言で頷いた。

「やったじゃん！ やるじゃんお前。いーなー、うらやましーな！」

急に大声になる。口がよく動く教師の多い学校だからか、もともと騒がしい教室だからそんなに目立ちほしくないものの、僕はちよつと周りの反応が気になってしまった。

「で、好きなの？ 好きなんだろう？」

「そんなじゃないよ、先輩とは」

ただの先輩と後輩だよ。と言った。僕が顔色一つ変えずに言ったからか、急に興味を失ったようで、友人は「あ、そう……。悪かったな、ちよつと下世話だったわ」と言って去っていた。と思ったら、つかつかと戻ってきて、「もし、お前が『そんなの』だって感じたら、その時はちゃんと、伝えるよ。お前の気持ち」と、妙に真剣な面持ちで言った。それからまた去って行って、今度は戻ってこなかった。

放課後がやってきて、僕は家庭科室へ向かった。やはりどうか、先輩は既に座ってかぎ針を振るっていた。昨日のマフラーはもう仕上げたらしく、今日は別の毛糸玉を取り出していた。まだ形というほど形にはなっておらず、何を作っているのかはわからない。

「なにをつくるんですか？」

「マフラーが出来たから、手袋かな？ 君は帽子の方がいいと思うかな？」

先輩は小首をかしげる。そうですね……と相槌を打ちながら先輩を眺める。

「帽子のほうがいいんじゃないですか？ 最近は手袋はめながらスマートフォンがしたいっていう人も多いでしょうし」

「うーん、そうかあ……じゃあ、帽子にするかな」

そういつて先輩は手の動きを速くした。集中モードに入ったようだ。きつともう、僕が何をいつても先輩の手は止まらないだろう。僕は何を作ろうかと思案しながら、とりあえず丸椅子に腰掛ける。ふと、黄色い小さな鳥の姿が脳裏に浮かんだ。そいつを作れるだろうかと少し考えて、まあ挑戦してみるかということ、黄色い毛玉を取り出した。

そんなに好きでも無いキャラクタなのに、なぜ急に思い浮かんだのか、それを考えながら、僕は黄色い毛糸をいじる。少しほつれさせたら、体毛のような質感になるだろうか。ふと先輩がいつも持っているスクールバッグが目に入る。今まさに僕が作らんとしていた鳥が、ちょこんとストラップになっている。なるほど、こんなに毎日目にしていたからかと合点がいった。それでやる気もちよつと増す。

しかしその鳥を作るのは決して簡単ではなかったようだった。というのも、僕はそいつがどんなだったかということ余り憶えていなかった。先輩のストラップを見ながらやるぐらいしか無いわけで、それを見られたら恥ずかしいという思いがあった。それで、何度か結んだり解いたり、そんなことをしていた。それは集中力が切れている証だから、今やってもうまくいかない。そこで僕は先輩に話しかける。

「今日ですね、友達に話しかけられたんですけど」
僕は彼のことを「友達」と呼ぶらしい。

「彼、手芸部を知らないっていうんですよ。酷いですよね」

「うち、手芸部じゃないんだよ？」

先輩が顔をあげないままに言った。え？　と思わず訊き返す。じゃあ僕は何部に所属しているのだ。

「うちはこれでも家庭科部だからね。家庭科に関することは何でもやるよ。知らなかった？」

「知りませんでした。春からずっと編み物ばかりなので、手芸部だとばかり思っていました」

「そうだよ。じゃあ明日は、お菓子でも作ろうか」

そういつて先輩は笑った。僕は笑えなかった。お菓子作りというのは、大の苦手なのだ。

翌日。

家庭科室——家庭科部へ行ったら、先輩がエプロンをして待ち構えていた。

先輩は僕の姿を認めると挨拶もなしに「じゃ、やろうか」といった。それから、エプロンを一つ、放り投げた。放物線を描いて、僕の胸元に収まる。

「それ、着て。それから、手を洗おう。調理をするときの基本だね」

はあ、とかそんな感じの気の抜けた返事を返して、僕はエプロンを着始めた。本当は、先輩が昨日言ったことを忘れてしまっ

ていて、いつもの様に編み物をしていないかな、なんて考えていたけれど、僕の都合に合わせてなんて、世界は回ってくれない。それに、考え方を変えればこれも悪くないな、と思う。だって、エプロン姿の先輩が見れるし、先輩のエプロンを借りれるし。

そんなことを考えながら、冷たい水道の水で手を洗った。ハンカチなんて持っているわけがないので、パップと手を振って水の飛沫を飛ばすだけです。ここが家庭科室だったということを書いて出してちよつと周りを見回した。思った通り、布巾が幾つか、かけられていた。あまり使われた跡がないようなやつだ。ちよつと拝借して手を拭いておく。

振り返ると先輩がハンカチをポケットにしまうところだった。もしかして 僕に貸してくれようとしていたんじゃないのかと思ひ当たる。しまった。ここは先輩の御厚意に甘えておくところだった。

「さて、きょう作るお菓子は、とても簡単なものです」

「はい」

「べっこう飴と言います」

「なんですかそれは」

聞いたことのない飴だ。しかし、僕がそう言うとき先輩は怪訝そうな顔をした。

「本当？ 本当に知らないの？」

「知りません。僕の知っている飴なんて、水飴くらいです」

あちゃー、と先輩は額に手を当てた。理科の実験では、もうやらないのかーとつぶやく。理科の実験？ 僕は首をかしげる。

「まあいいや。やってみよう。簡単だから」

「はあ」

「材料はこれです」

といって、先輩は机の下から袋を一つ取り出した。その外装表記を信じるならば、それは砂糖だった。上白糖、と書いてある。先輩は他には何も取り出さない。

「……………」

「どうしたのかな？」

「これだけですか？」

「そうだよ。簡単でしょ？」

彼は、べっこう飴が水と砂糖だけからできているというのとをなかなか信じなかった。それだけでまともなものができるのか？ と非常に疑り深かった。どうやら料理やお菓子作りが苦手らしいので、簡単なべっこう飴にしたのだけれど……。こんなかんたなお菓子なら小学生でも作れると思うんだけどなあ。

彼がなかなか動こうとしないので、私はアルミ泊で型を作つて、それからそこに水と砂糖を注ぐ。それからフライパンの上にそれを置いて、火にかけた。

「はい、しばらくほっとくから」

「いいんですか、それで」

「いーのいーの。それより君も、家庭科部の部員なら、せめてこれくらいは作れるようになってこうよね」

「……はい」

なんて言っている間に、べっこう飴に色がつき始めていた。もう少しだ。火を止めて冷ます。これが固まったらしまえば完成だ。

「さて、君もやってみようか」

そういつて上白糖を渡す。彼が受け取ろうとして、手と手がぶつかる。ふと彼の手から力が抜けて、上白糖の袋が落下する。どさ、と重い音を立てて倒れた。白い粒子がこぼれ出る。彼が慌

ててしやがみこんで、拾い上げる。私は、手箒か何かを探して、教室の後ろの方のロッカーを探る。やつとみておいて、と彼に声をかける。こわばった声で、はいと返ってきた。そんなに緊張することではないのに。

箒を見つけたので床を掃く。

彼が私に好意を持ってくれていることは知っている。彼のクラスメイトだという私の従弟がそう教えてくれたし、それよりも私はひどいにぶちんというわけではない。ただ、わからないのは、なぜ彼が、私に好意を持ってくれているのかということだ。こんな、授業も受けず部室か保健室に入り浸っているような、不良品の女に。

だからきつと、私は彼の想いに応えることはできないだろう。

「先輩、できましたよ！ 色づいてきました！」

はしやく彼の声が私を呼ぶ。どれどれ、おお、うまいじゃないの、と私は少し彼に寄り添う。彼は一歩下がった。彼の想いを受け止める資格なんて無い私だけれど、もう少しの間、ちよつとした夢を見ることならば許されると思うのだ。

「美味しそうに出来たじゃない。さっすが家庭科部」

先輩がウインクを飛ばす。反則だ。それから先輩はアルミ箔から飴の本体を剥がした。まだ熱いその飴を、先輩は口の中へ放り込む。

「上出来、上出来。失敗することを恐れていたらお菓子は作れないよ」

先輩が、口の中で僕が作ったべっこう飴を転がしながら言った。ほい、と先輩が作った方のべっこう飴を投げてよこす。

「じゃ、いただきます」

僕もアルミ箔を剥がすと、もう常温になっているべっこう飴を口に含んだ。砂糖だけしか使っていないにもかかわらず、くどすぎない甘さと香ばしさが口の中で広がる。僕も先輩のように飴を舌の上で転がした。

その拍子に。

「すきです、先輩のこと」

という言葉が僕の口から飛び出した。

空気が固まった。二人が飴を口内で転がして、齒と飴がぶつかる音がやけに大きく耳に届いた。

「……………」

「……………」

僕も先輩も喋ることが出来ない。自分でもなんでそんなことを言ってしまったのかわからなかった。そういう感情ではない、と友人にもそう言っただけなのに。僕は、先輩のことが好きだったのだろうか。深層心理ではそう思っていたのだろうか。

「きかなかったことに……してあげるから。また明日も、部活しに来てね」

先輩が小さな声で言った。それから一瞬、先輩は教室を飛び出していった。

僕は後を追えなかった。

ずっと、なんで昨日あんなことを言ってしまったのかと考えている。僕は確かに先輩に対して好意を抱いていたけれど、それは恋心ではないかと思っていた。どちらかといえば、友達のようなだけ。昨日、あのべっこう飴を食べた時に、ああ、この甘いお菓子は、先輩がつくったんだな、と思ったその時にはあの言葉がべっこう飴と一緒に舌の上を転がっていて、ぼろと口の外にこぼれてしまっていた。

やはり僕は先輩のことが好きなのか。実はずっとそうだったけな。先輩との中も進まねえ。気づいたんだろ？ 自分の気持

ののだろうか。そうだ、と考えるのが自然に思える。そうでなければ、僕はあんなに毎日部室へ通っていたのだろうか。それは、もちろん、先輩がいたからあの部活に入ったのではなくて、僕は自分のやりたいことをやるために部活に入った。編み物なんかは家でもできる。無理に部室へ行く理由は何もない。

「おい、どうしたよ。部活じゃねーのか？」

友人が声をかけてくる。時計を見れば、とうに授業は終わっていたようだった。ずっと先輩のことを考えていたから、気が付かなかったのだ。

「……いや、今日は、帰ろうかな」

呟くように言った。

「なにいつてやがる。お前」

「は？」

友がいきなり怒りをはらんだ声を出して、僕は戸惑う。

「お前、先輩に会うのが気まずいんだろ」

「……………」

僕は何も言えない。

「行けよ、部活。先輩が待っていてくれるんだろ？」

先輩は明日も来てと言っていた。だが果たして本当に、待つべっこう飴と一緒に舌の上を転がっていて、ぼろと口の外にこぼれてしまっていた。

「いいか、こんなところだからためらってたら、お前はどこへも行

ちに」

僕は、うなずかざるを得なかつた。

「じゃあ行けよ。今すぐ行け。それで、お前の先輩の隣にいろ」
いつになく厳しい友人に僕は何も言えず、ただ黙って従つた。

部室に行くと、先輩は一心不乱にかぎ針を動かしていた。僕

が挨拶をしても、聞こえていないようだった。仕方なく僕はいつものように先輩の向かいに座つて、何を作ろうかと思案する。けれど、なかなか何を作りたいかが定まらない。その間にも、先輩はしゆるしゆると何かを編んでいく。なんにも作れそうにないので、意を決して声をかけた。

「先輩？」

「……ん、ああ。来てたの。こんにちは」

先輩は編み物への集中を切らさずに返事をする。だが、いつもよりそつけない気がする。昨日の動揺からして、今日は先輩がいなくても驚かないと覚悟を決めていた僕としては、肩透かしを食らつた気分だ。昨日のことは、先輩の中ではなかつたことになつてしまつたのだろうか。練りに練つた言葉ではないし、言おうという明確な意志があつたわけではないけれど、それは、なつとくがいかない。——それに。

「先輩。僕ね」

「うん、何かな？」

「——考えたんです、僕。それでやっぱり、先輩のこと、好きです」

先輩の、手が止まつた。

「どうして、そういうことを言うの？ 昨日、『きかなかつたことにしてあげる』つて、言つたじゃない」

「——え」

「なんで、私のこと好きになつちやうの。私、大した魅力なんて無いじゃない。貧相な体で、ずっとここに入り浸つて……。知つてる？ 私、保健室登校なの。ずっと。……私は君が想像するような私じゃないんだよ？ 必死に取り繕つて、良い格好をしようとして……。それが私。君とはほとほと不釣り合いなんだよ」

先輩の頬を、涙が伝う。先輩が泣いているのを見るのは始めてだ。先輩の内側の方にあつた感情が噴き出してきたのだろう。

支離滅裂ではあるけれど、先輩が何を言いたいのか、それは僕にちゃんと伝わつた。

「なんで先輩は泣いてるんですか」

「それは君が！ ……ごめん」

「なんであやまるんですか」

「……………」

「昨日は僕も驚きました。自分でもあんなことを言うとは思つてなかつた。——でも、今日はちゃんと、自分の意志で言いました。僕は本当に、先輩が好きだ」

脳裡に、怒ったような友人の姿が浮かぶ。ありがとう、僕は
このころのなかで彼に感謝した。

「先輩が何であろうと、どう思っていようと、僕は先輩のこ
とが好きですよ。先輩が何を繕っていても、それは先輩が僕に良い
格好をしようとしてくれてるんじゃないですか。先輩のこと、好
きになって当然ですよ。この教室で出会ってから、ずっと先輩が
あみものする姿を見てきたんです。格好良いじゃないですか。素
敵じゃないですか。それに先輩、かわいいし。」

なにも——なにも先輩が引け目を感じる必要は無いんです。
ただ僕は先輩のことが好きで、いつか先輩も僕のことを好きにな
ってくれば——それで全てが解決ですよ。僕には釣り合わない
なんて、そんなこと言わなくても、ただ『君のことが好き』って
言ってくれば、いいじゃないですか」

僕も、感情に任せて支離滅裂なことを喋ったと思う。でも、
これであいいだ。

先輩は、黙って俯いていた。しばらくそのままできて、それ
から口がすぼんで、横に広がった。顔をあげて、きつとこちらを
睨みつけた。

「……ねえ。君の事が、好きだよ。ありがとう、私の事を好き
だと言ってくれて」



二十日草の命日

箱庭氏

私は平生と同然に牡丹を水から揚げて茎をばきと折った。看護師が片付けていた途中らしい屑の入った袋に放った。花弁は何かの碎片に破れた。

噓せ返る様な無垢で色取られた病室に牡丹を添えた。清潔は一点で犯された。

§

「又、いらせられたのですか」

この部屋に一つ用意された窓の際に身を横たえ、彼は冷たい光を羽毛で半分遮ってそつと云った。此方へ向けられた瞳は深く煌めいていた。私は彼の近くの、色を失いかけた牡丹の茎をばきと折って手近な屑籠へ放った。難なく指からするりと落ちた。緩くなった花弁は紙屑に紛れて崩れた。

「そろそろ花を変える時期かと思ひまして」

「いや然し貴方、少し前にいらせられたではないですか。その花はそんなに持たないものなのですか」

彼はゆったり窓の方に目を遣って云った。小さな布の擦れる音が彼の声と混ざってそのうち区別が付かなくなつた。私は牡丹の入っていた水を外へ流そうとしながら「似合わないのですか」とだけ云った。

「何に似合わないのですか」

彼は私を顧みた。彼の黒髪が冷えた宙を舞って、薄く光を返した。彼の言葉は病室とは又違う清浄を以て私の耳を打った。私は何も言わずに、牡丹を花瓶へ入れると笑みだけを傾けて病室を出た。

私が又その病室を訪ねた時、彼が包まれていた潔癖な繭は凝と息を詰めて空気だけ含んでいた。窓際の牡丹は疲労を見せていたが僅か鮮やいでいた。

窓の外を馬鹿にする様な純白を身に纏った病室に牡丹を加えた。純白は馬鹿に変わった。

「又、来ましたね」

窓際の羽毛の布団を半分剥いで、窓を背に腰掛けた彼女は淡く色付いた身体を此方へ向けてさつと云った。するりと投げ出された体をそれは唯柔らかく受け止めているだけだった。私は解け掛けた牡丹の茎をばきと折って手近な屑籠に放った。草臥れた花弁は少しだけ粘着く様に指に絡んだが、到頭滑り落ちて力無く屑に馴染んだ。

「ええ、そろそろ——」

「花を変える時期かと思ひまして、ですわね。何時も何時も同じことばかりを仰せられるのですもの」

彼女はゆっくり笑った。私はひっそり黙った。くすんだ水を捨てて、微温い水と艶やかな牡丹を入れた。彼女の笑い声は水と流れた。

「ねえ、貴方私の前の方の時も来ていたのですってね」

彼女は全く同じ調子で云った。私はいいと答えた。それからそのずっと前からですとも云った。口を噤んで、此方を窺う彼女の髪が仄かに反射で縁取られた。私は彼女を一度だけ顧みて病室を出た。

私が数度その病室を訪ねた後、彼女が傍に丸めていた柔らかな塊はこの季節独特の冷気に沈んでいた。窓際の牡丹は細い糸でやつと美しさを留めていた。

私は平生と同然に湿った牡丹を二つにばきと折った。窓の外踏み散らされた桜の花屑に紛れ込まれた。花卉は通った靴に踏まれて直ぐに見分けが付かなくなった。

3

吐き出しなくなる様な清澄が閉じ込められた病室に牡丹を重ねた。清澄に外気が混ざった。

「又、牡丹ですか。知っていますよ」

羽毛に大人しく包まれた少年は宙を見つめたまま口先だけでふわりと云った。まだ幼さが残る面影が強い光で床に塊として映し出された。私は暑さに惚けた牡丹の茎をばきと折って乱雑な屑籠に放った。逆上せた花卉は抵抗する気もないかのようにゆっくり沈んだ。

「何をですか」

「貴方が牡丹しか持って来ない事だとか。貴方がずっと前から此処に来ている事だとか」

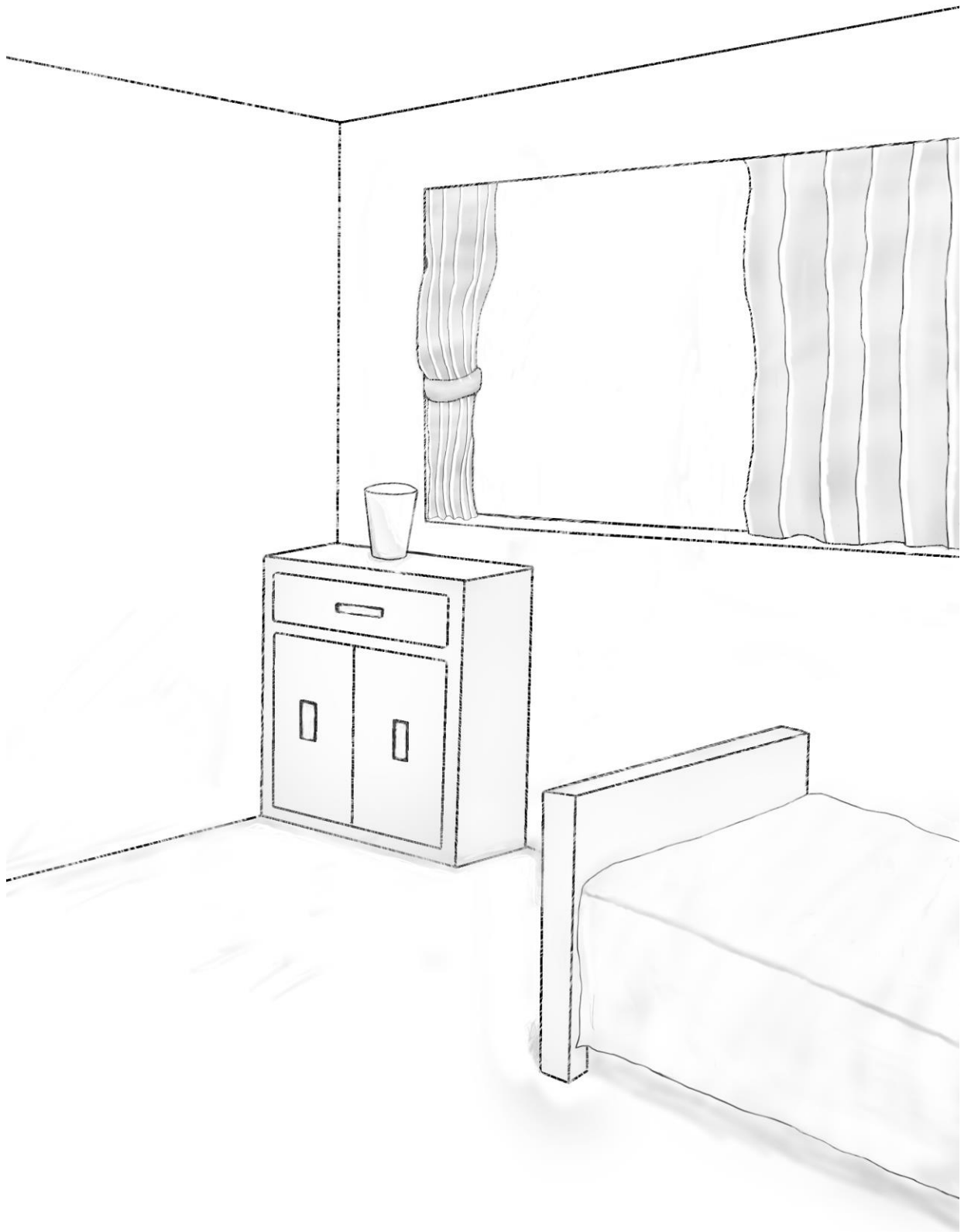
少年は幼さ特有の無性別な顔を以て私を顧みた。窓から差す鮮やかな光が少年の本当の表情を、知らぬ内に隠していた。私は濁りを含んだ水を窓から表へ流し、何時の間にか項垂れてしまっていた牡丹を入れて、「然うですか」と一言云った。

「——牡丹が、二十日草と呼ばれる事も」

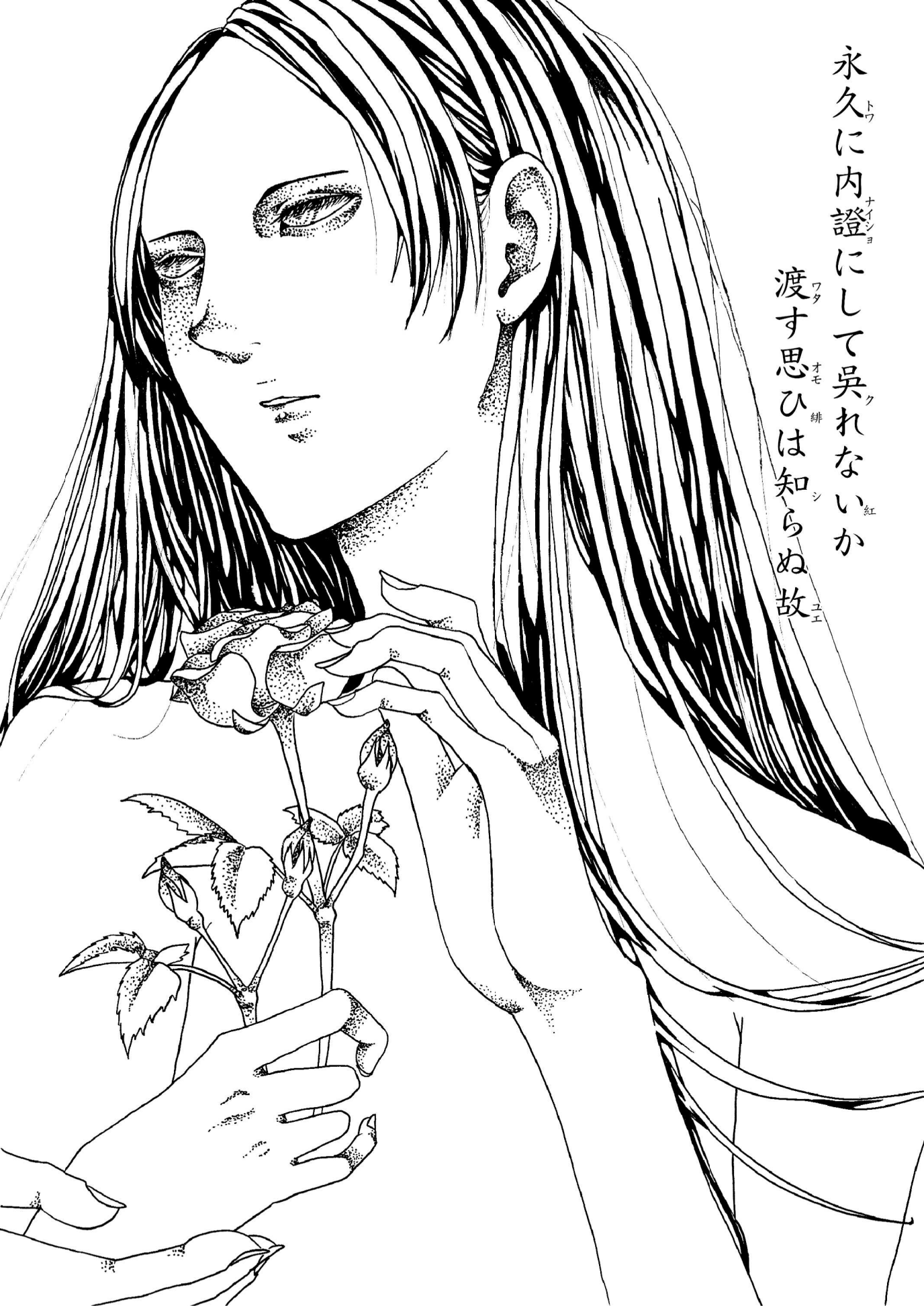
少年はゆっくり瞳を閉じた。私はこっそり黙っていた。誰も何も云わなかった。光がしっとり張り付いていた。病室がうつ

そり臥せっていた。

やがて看護師が部屋に入ってきた。潔白は外気と混ざり新たな何かに成った。私は平生と同然に濡れた牡丹の茎をばきと折った。花卉の沈んだ屑籠に放った。花卉はどちらが先か判別付かない程に溶け合った。



イラスト



永久トウに内證ナイシヨにして呉クれないか

渡ワタす思オモひは知シらぬ故ユエ



illustration:kuromu

Kaiwai

こんにちは ちげです

現視研副会長イラスト班代表

新二年のkaiwaiです
イラストの練習とかを
しています
昨年度はRunawayという
ゲームの原画を描いて
いたりしました
近頃ゲーム作りにも手
を出していたりいなかっ
たりします

イラスト描いたり曲作ったりマイクラやったりしています。
ほぼマイクラです。

知識は浅いながらも自由いろんなことやってます。

最近は動画にも手を出し始めました。

副会長とか代表とか言ってますが、全然えらくないので
気軽に話しかけてね。

あでもコミュ症だったわ



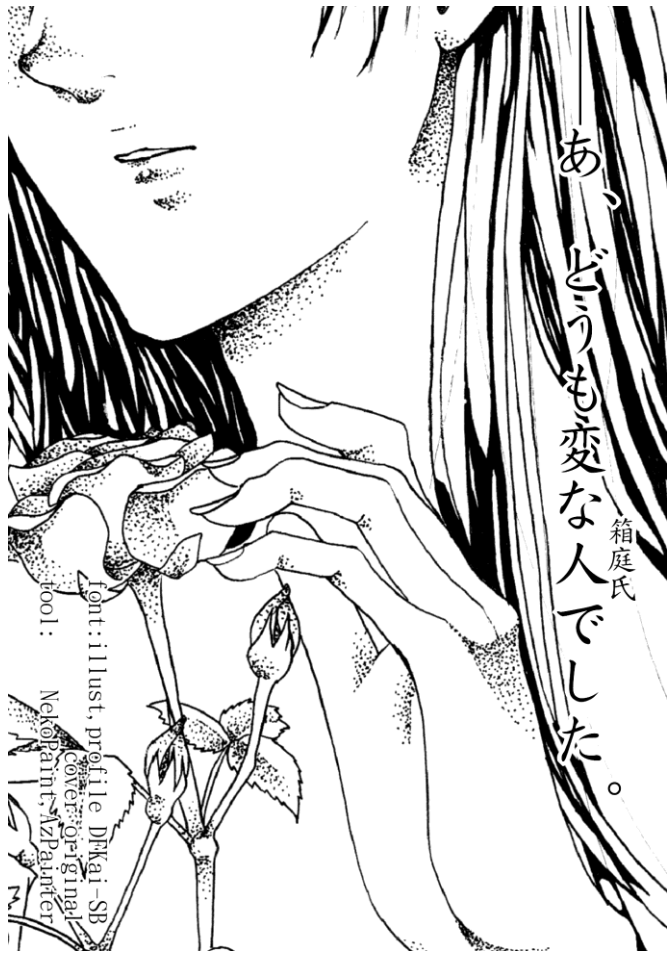
かおす

音楽班してます
新二年のかおすです

**打ち込みは面倒くさいのでピアノ/
から入力して作ってます**

**去年度はゲームのBGMとかSEとか
取説とか作りました**
ちょっとTRPGにも参加しました

**次の音楽班のまとめ役になります
るので、どうぞよろしく**



3S電子制御工学科の黒板です。

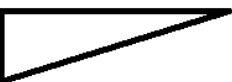
スペースが余ったので奈良高専の七不思議を書こうと思います。

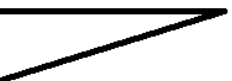
奈良高専七不思議

- ・本館前の池に落ちると留年する (よって通称留年池)
- ・学年が上がると人が増えている
- ・学年が上がると人が減っている
- ・学年が上がらない

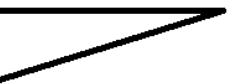
同じクラスの先輩によれば、「留年池はガチ」だそうです。僕は最近へそまで浸かってしまったので、毎日震えて過ごしています。新入生の皆さんは気を付けてくださいね！

HN  小刀

学年・学科とか  3年の電子制御工学科
通称3S

やってること  たまに文章書いてたりする
ただ、たまにとは言っても
月一くらいじゃないかな

性格とか  割とそれなり
ごくごく一般的な人間だと
自分では思ってる

部内の立ち位置  文章書く人の中では偉いらしい
ただ実際はほとんど仕事しないし
気軽に話しかけてくれると嬉しい

遭遇方法  割と基本的に部室にいる
聞きたいこととかあったら
来てくれたら割と会えると思う

……これ何？  「小刀」ってことで小刀を
(ただの四角と三角じゃないか
って言われそうだけどね)

ま ←
ブックオフに
います

とか。

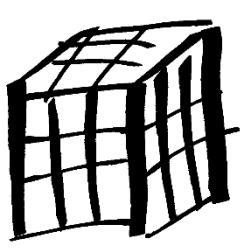
WOLFです
Unityしか 絵しか
TRPGしか 会話しか
編集しか
やります



この顔にピンときたら
たぶん私です



4Sえびそん 音楽/書道

^^
O Xロ-パ-の
皮が好き。
1面が
限界です。 



イラスト班のクロムと申します。
昨年度は、1月にインテックス大阪にて開催された
ComicTreasure25にサークル参加し、同人誌を頒布
するなどの活動を行いました。

Q. キリギリスってなに？

A. バッタみてーなもん
もしくはその名前を名乗る虫嫌いの人

Q. なんで文字がちっちゃいの？

A. 声がちっちゃいからだよ気にすんな

Q. なんで声がちっちゃいの？

A. なんかせげ理由があんだよ

Q. もしかしてコミュ障の人？

A. うっせーなんでわかったためー

Q. なんでコミュ障なの？

A. わかったら苦労してねーよ

Q. 根暗さんなの？

A. 人のえびそんて楽しいかこのやろう
心でっかい

Q. なんで文字が歪んでるの？

あとがき

文章を書くことが嫌いなくせに編集とかいろいろやってる wolf です。
春会誌、いかがだったでしょうか。今、自分も編集しながら読んでいるのですがこんなの自分には到底書けないなあ、と思うばかりです。

この「げんしけん」の活動についてはもうほとんどまえがきで書かれてしまいましたので活動の一つ TRPG について少々。

TRPG (テーブルロールプレイングゲーム) は「ダンジョンズ&ドラゴンズ」や「クトゥルフ神話 TRPG」を始めとする GM (ゲームマスター) と PL (プレイヤー) が対話しながら遊ぶゲームです。

GM がストーリーを持ってきて PL がその登場人物になりきって謎を解き、敵と戦い、時には無理難題に応え、時には運に身を任せる、というとても楽しいゲームなのですが、このげんしけんでも時々やっているのですが、時間が合わない、人が集まらない、とかいろいろ理由で破綻してしまうことがかなりあるのです。個人的には

もっと TRPG したい！

もっと SAN 値削りたい！

もっと神話生物で遊びたい！

ふんぐるいむぐるうなふくとうるうるるいえうがふなぐるふたぐん！

なのですがこう率先して RP してくれる人というのがなかなかいないわけでした・・・

そこで今、

TRPG に興味がある

いあ！いあ！くとうるふふたぐん！

はい、私は完璧で幸福な市民です

な、人を募集しています

活動で TRPG するのは多分ここだけ！

(あとがきなのに会誌と関係なくなってしまった・・・)

電子制御工学科 3年

高田一紀(wolf)